

北大春日

小林和子

北大は「ほくだい」ではなく、「ペーダー」北京大学である。

この春、北京大学の現代日本研究コースで「日本証券」について講義をした。

北京の春は日本より遅く訪れ、夏が早く来る。その短い春の日を、大学のキャンパスで呼吸し、小さな窓から眺めてきた。天安門事件の後、九一年に訪れたときに比べて、人々の表情が春めいていたのは嬉しかった。

北京大学の中を歩いて講義室までいく道筋、黄色や薄桃色の花がたくさん咲いている。黄色い

は「迎春花（いんちゅんほあ）です」という。この迎春花が色々ある。最初にいわれたのは、れんぎょうの花であった。次に指差すのを見ると、丈の低い灌木で、しだれ柳のような細い枝が四方に広がり、緑の小さい葉とともに小さい黄色い花が散らばって咲いている。日本では何という花だろうか。

同僚の日本人の先生方の話では、満州開拓団の手記には、地を這うような黄色い草花が「迎春花」と書かれているそうである。冬が厳しい土地で、何よりも早く春の到来を告げる健気な黄色い花

が、それぞれ「迎春花」とよばれたのであろうか。

中国人の日本専門家を育てる

九一年に私用で北京大学を訪れたとき、留学生・外国人教官のための会館である「勺園」内に、新しく現代日本研究コースというものができたと聞いていた。そのときにはまさか自分が派遣されることあるとは思わなかったが、どうも組織の性格がはつきりつかめないような気がしたのを記憶している。

北京大学・現代日本研究コースは、現代日本の経済、行政、産業、社会等の現状と諸制度の研究、政府と産業界を中心とする政策形成過程の研究を行い、現代日本に関する適切な知識と専門的知見を備えた中国人専門家を養成する目的で、日本側は国際交流基金、中国側は国家教育委員会が提携

して、九〇年九月に北京大学経済学院内に設置された。

同じく国際交流基金と国家教育委員会が協議して設立した北京日本学研究中心の一部門が北京大学に委託されたという形をとっている。北京大学の中にありながら、やや宙に浮いているような、心許ないところがある。

学生（研修生とよばれる）は修士号取得者およびそれと同等の学力を有する若手の実務家、研究者で、各年二〇名、研究期間は一年間（九四年度は七カ月）である。講義は国際交流基金から派遣される一〇名前後の日本人教授と、北京大学を中心とする中国人教授が行なう。現地のマネージメントは双方の主任教授と北京大学経済学院院務委員会が行なう。日本側の主任教授は毎年交替するので、いきおい中国側の勢力が強い。

今年の学生二〇名は国家計画委員会や各省計画

委員会の人間が八名、その他の公務員が四名、幹部学院等の講師が三名、残る五名が「会社」に属する。北京大学出身とか北京に住んでいる人は少なく、アモイ、新疆、内蒙古等各地から来ている。コースの開催と研修生の募集は新聞に広告され、学生はそれぞれの所属単位（職場）から派遣されて来る。費用は所属単位がもち、多くの学生は家族と故郷を後にして、北京大学の学生寮に入る。

いわば所属単位の期待を背負って首都北京に派遣されるのだから、そう若い人はいない。今年の二〇名のうち一九名までは結婚しており、平均年令は三才とのことだった。男性でいちばん若い二七才の人が唯一人未婚であった。女性四名は全員家庭を置いてきており、うち一名は六才の子供をご主人に託してきたという。彼らの多くは「一个好」（二人っ子が良い）政策の時代に結婚したので、子供はいても一人である。

金融・証券が今年の焦点

コースのカリキュラムは、日本側が「日本の現代化過程」「日本の政府と行政」「経済理論と日本経済」「日本経済計画と財政」「日本金融」「日本証券」で、学生の話では今回の募集広告では金融・証券の講義が売り物であったという。「日本金融」は以前からあるが、「日本証券」は今年が初めて、金融・証券と揃ったところを強く打ち出したらしい。もっともそのわりには講義時間が少ないと文句もいっていた。これに中国側教授の日本、中国、世界経済に関する講義が加わる。

日本側教授の講義は多く前期に集中され、重ならないように組まれている。主任教授一人は全期間にわたって滞在するが、他の教授陣は一〇日ぐらいずつの短期滞在となる。日本専門家を養成す

るのだから、講義はすべて日本語で行なわれる。

日本人教授にとっては楽なシステムだが、中国人の学生にとってはなかなかきつい。昨年まではこの点でいささか問題があったらしく、「日本語がわからない」「内容が理解できない」「学力が低い」と酷評する日本人教授もあったようである。今年これを改善すべく日本語教育専門家が二名、日本人教授の講義開始前に着任、かなり集中して強化レッスンをを行い、聞き取る力は相当増大したようである。それでもやはり「ゆっくり話してください」「繰り返し返してください」「板書してください。」と、中国側主任教授の田万蒼先生にいわれた。

この先生は熱心で、都合が付くかぎりすべての講義に出席された。講義室の「かぶりつき」は田先生の専用席になっていた。

私は想像力のあるほうではないが、英語で講義

を受けることを考えると頭が痛い。

若い中国の学生が、日本専門家になることを選り、懸命に日本語を学び、相当の力をつけたにしても、日本の証券市場の講義を日本語で耳からだけで理解するのはきついだろうと思った。幸い、日本語と中国語には共通の文字表現がある。教科書一冊を教える時間はないので、日本でも大学でそうしているように一コマについてB4紙一枚のレジュメを用意していった。もっとも日本では難しい漢字は使わないように気をつけるのだが、中国人向けにはその注意は不要である。中国で日常使用する文字は「簡体字」であるが、大学卒業生のような教養人はむろん正字を読み書きできる。町中でもけっこう正字を見かけた。出発直前に必死になってワープロで打ったレジュメはなかなか好評で、「眼」で理解することを助けたようである。

日本語の理解はある程度助けたにしても、証券市場に対する興味・関心の程度は個人個人で違う。同じく経済運営に携わっているといっても、専門は牧畜や海洋漁業だという人もあり、自分の会社の外債発行の際に通訳をした、日本の証券会社に研修にいったという人もある。しかし全体としては株式会社の運営と資金調達に強い関心を持ち、日本の市場にも大きな期待をかけているようだった。

本来の学生ではないが、日本学研究センターに河北の大学から内地留学している女性講師が私の講義を聴きに來ており、宿舎まで質問にきた。なんと一人で高杉良著『小説日本興業銀行』を翻訳しているそうで、わからない点をまとめて質問にきたのである。道理で、講義で証券恐慌の話をしたときいちいちうなずいていたわけである。この女性も子供をご主人に託してきており、「今は家

事をしないですむのではほんとに嬉しい」といていた。中国の女性は天の半分を支え、強いのは確かであるが、小さい子供がいれば話は違う。家事、育児の負担はやはりかなり大きいのであろう。

翻訳といえば、今年の学生たちは共同で奥村宏著『株とは何か』を翻訳しているという。せっかく同じコースで七ヵ月間研究するのであるから何か記念になる共同作業をしたいと考えて、中国側教授の朱紹文先生に相談した。朱先生は戦前に東大を卒業し、北京大学で日本経済史等を講じてこられた。日本留学者は肩身の狭い思いをした時代が長く、国交回復後ようやく日本の先輩後輩と行き来を始め、今は日本の市場経済を中国に紹介し、日中の研究者の交流を図ることをご自分の使命と心得ておられる。

奥村宏氏を北京大学によんで講演してもらったこともあり、この本の翻訳は朱先生が学生に勧め

た。ただし「証券関係の本を訳したい」といつてきたのは学生の方だという。奥村さんは、私にはこの研究所の先輩であり、証券市場研究の先輩でもある。「良く存じています」というと喜んで『日本市場経済』という朱先生が発行されている雑誌を託された。日中両国の事を良く理解し、経済がわかる方だけに、朱先生の「今の中国の証券市場は良くない、いたずらに射倖心をあおり、投機をそそのかして、中国人の倫理道徳心をおとしめている」という言葉には耳をかたむけさせる響きがあった。

正論である。

しかし、中国人一般は投機というか利得のチャンスにはとびついた。

「街にも書店にも溢れる「市場経済」

北京大学での講義が終わった後、上海、香港、深圳の証券市場を見て回る予定で、また証券図書館のために中国市場関係の図書資料を収集する仕事もあった。成田を発つまでは講義の準備と中国語の基礎を丸暗記するのがせいっぱいで、とても中国の証券市場について勉強するところまでいかない。日本の証券会社の方からいただいた調査報告類をとにかくも持ってきただけだった。

北京に着いた日に、日本側主任教授の松本繁一先生にお目にかかったとき、お部屋にある『社会主义市场经济経済全書』という百科事典のような大部の本を見せていただいた。私も入手したいと思い、翌日から書店を見て歩いた。驚いたことに最

初に入った書店（北京大学の外の新華書店）で見つかった。九一年に北京に来たときの経験では、品物は見つけたときに買わないと、すぐに売れてしまい、いつ入荷するかわからない。あわてて手にとり確保した上でまわりを見回すと、あるわあるわ、証券関係の本がたくさんあるのにびっくりした。

再び九一年の経験則で次から次へと積み重ね、よろよろとレジまでもっていき、レジ係に呆れられた。北京は土ぼこりの街で、書店の中もうっすらと汚れがたまっているの、手は真っ黒である、その手で一〇〇元紙幣を何枚も支払って、普通の人からみれば何の役に立つのかというような本を何十冊も買う外国人は、どう見ても「変な外人」に違いない。支払ったのはおそらくはレジ係の一ヵ月の給料以上の金額だったろう。こんなにすぐにたかさんの本が買えるとは思っていなかった

たので、買物用の袋を持っていかなかった私は、ひもでからげただけの本を再びよろしなながら持って帰った。これを手始めに、歩いて回った多くの書店には本がたくさんあった。「経済書店」「金融書店」という名前の書店には特に新刊書が多く、「市場経済」「証券市場」「股份公司」等がつく本がずらりと並んでいる。中身はというと、これはピンからキリまであり、「中国証券市場全書」や「証券市場法制と実務」というような網羅的な大部のものから、端的に「株で儲ける方法」式のものまで揃っている。とりわけこの一、二年で出版されたものが多く、少し前に出版されたもののもう無いようだった。

証券専門の新聞や週刊誌もある。せっかく中国の学生と毎日講義で顔をあわせるのだから、なるべく講義のなかでも「日本ではこうだが、中国ではどうか?」「日本語ではこういうが、中国語では

こうだろうか？」と答を促すようにしてみると、非常に積極的に競争で答が返ってきた。しかし彼らが即答できない事柄もあり、「中国の株主総数」もその一つであった。数日たって、ある学生が「新聞記事ですが……」といって持ってきたのが、『中国証券報』である。これによれば九三年に新設増加した株式会社の数は九四四〇、全国の株式会社数累計は約一万三〇〇〇、株式資本総額は約二〇八六億元、年末上場会社は一二二、外国上場の大企業は六、全国の証券登記機構は五一、全国の株主数は約二五〇〇万人に上る。新設株式会社（股份制企業）のうち股份有限公司二九六八、有限责任公司六四七二、内部持股公司一七七六で、総計は合わない。この他ざっとみて全国城鎮股份合作制企業が一〇万超、農村郷鎮企業股份制が二〇八万ある。

『中国証券報』は全国紙だと北京ではいって

たが、上海できくと「そんなことはない」という話、上海では当然『上海証券報』が読まれているのである。

またある日、学生に教えてもらった西単の經濟書店にいった帰り、しょうこりもなく重たい本を抱えて歩いていると、路上の物売りの車が目に入った。西単是北京っ子に人氣のあるファッショナブルな街筋であるが、そういう場所にも屋台の物売りがたくさんいる。ちょっとした食物と飲み物、あるいは煙草や果物、新聞や漫画等を売っている。眼を惹かれたのは「証券」という文字があったためである。いや、はっきりと「証券市場」と書いてある。中国証券市場研究設計中心というところが発行している『週刊証券市場』であった。その号の表紙は「北京王府井外文書店」株式会社の法人株募集であった。

日本人から見るとこの法人株（法人股、ふぁー

れんぐー) が今一つのみこめない。

北京王府井外文書店は北京市外文書店、北京国際信託投資公司等の五団体が共同発起設立した会社で、その経緯からして、中国の文化界に株式会社化の規範を率先して示すべき立場にあるらしい(投資家向けの目論見書のようなものによると)。

総株式資本は五〇五八・九六万株、うち発起人株が七六・三%、定向募集法人股二一・二%、内部職工股二・五%となっている。額面は一元、発行価格は一・一〇元、募集期間は九四年四月二〇日～六月一九日である。この例では、すでにいる発起人が国家机关や株式会社であり、他に従業員が若干を持つが、今回の「募集」は法人股だけで、すなわち一般個人はまったく係わらない株式会社ということになる。

となるとこの会社は上海や深圳の証券取引所に上場することはできない。もし上場するとすれ

ば、北京で運営されているSTAQ系統とNET系統の法人股市场に上場することになる。現在STAQ系統に上場されているのはわずか一〇社の法人股にすぎないから、はたしてこの会社の法人股がすぐに上場されるものかはわからない。株式の種類別株主構成は、今のところ個別会社の例を積み重ねてみていくしかないように思われる。

北京大学・現代日本研究コースにとって、「日本証券」の講義は今年初めて行なわれたものであったが、実は女性の教授も初めてだったそうである。「おなご先生」はけっこう珍しがられ、とりわけ女性の学生たちにいろいろ日本の事を聞かれた。日本大使館の方の意見では、中国の女性は仕事と家事育児の両立に疲労し、「家庭の主婦で優雅に暮らす日本女性」は羨ましがられているのだそうである。知らなかった。

しかし「先生のように働く日本の女性は初めて

知りました」とまでいわれては、おなご先生も困る。証券市場以外にも、日本の社会一般についていろいろ話すことになった。証券不祥事の話をしたときには、「暴力団」の存在が彼らにはどうにも呑み込めず、こういう社会成員がどうしてできるのかまで説明するはめになった。

北京の春は黄河からの風に吹かれつつ、みるみる初夏になっていく。

講義を終え、上海に発つ前の日には白い柳絮が飛び始めた。

迎春花に迎えられ、柳絮に送られたおなご先生の日々であった。

(こばやし かずこ・当研究所主任研究員)